

昭和ひとケタ族の戦争体験

岩佐貞彦

上鷲宮四丁目

自宅の消失

昭和二〇年（一九四五年）三月、中学の卒業式を済ませ、一年近く続いた勤労働員生活にも別れを告げた私は、翌四月に東京農大専門部に入學し、学業生活に戻ることもなかった。

しかし、この新しい環境での生活もそう長くは続かなかった。日増しに激化する米軍の空襲はその目標を一般住宅街にまで拡げ、四月十四日未明の空襲ではとうとう私の家も焼失し、さらに五月末には大学もその大半が焼失してしまった。

四月十三日夜半、度重なる空襲警報に、やや警報馴れしていた私たち家族は、その夜のサイレンも「またか」という感じで受け止めていたが、ラジオが敵機上陸を告げると相前後して、上空からの爆音がいつになく急接近してくるのがわかった。

「早く通り過ぎてくれ」と心に念じながら上空を眺めていると、突然、照明弾が投下され、あたり一面がくっきりと照らし出された。

「とうとう来た」と思った次の瞬間、焼夷弾の鋭い落下音が

迫り、防空壕に飛び込むひまもなかった私は反射的に玄関の軒下に身を寄せたが、ほとんど同時に「ズン」という落下物からの衝撃が足下から伝わって来た。

投下された油脂焼夷弾の一発が、軒先をかすめて一メートルほど離れたヤツデの茂みに落下したが、幸い地面に深く刺さって不発に終わったようだった。

「助かった」と気が緩みかけたその時、少し離れた所から「早く火を消して！」という、母の絶叫が聞こえてきた。家の屋根を突き破った一発の油脂焼夷弾が、少し間を置いてから燃え広がろうとしていたのだ。

すぐさまバケツで繰り返し水をかけ、いったんは消火に成功したように見えたが、乾き切った屋根裏の木材に染み込んだ油はすぐにまた燃え上がり、酷使した井戸のポンプがこわれて、とうとう手の施しようがなくなってしまうた。

せめて運び出せるものを……と、一瞬考えたが、急にドツと押し寄せた無力感で身体が動かなくなり、ほとんど何も取り出

せなかつた。そして燃えさかる家から二〇メートルほど離れた畑の中に腰を下ろし、自分の生まれ育つた家が燃え盛るのをじつと眺めていた。ほぼ燃え尽きようとする頃、突風が吹き荒れ、その直後に静寂が訪れた。

気がつくとも両眼が激しい痛みに襲われ、顔全体がひりひりして、その場を動く気力さえ失われていた。夜が明けて間もなく、近くに住む友人が握り飯を持って見舞ってくれたのが本当に嬉しかった。

罹災直後の生活

家族全員が無事だったのが何よりの救いだったが、住み馴れた家を失ったことのショックは並たいていではなかつた。

それからしばらくの間は、物置の中に造つた防空壕をよりどころにした生活が続けたはずだが、空襲のショックが余りにも強かつたせいか、そのときは余り覚えがない。ただ、始まつたばかりの大学の講義についていくため、わずかな勉強道具を抱えては友人・知人の家を渡り歩いたが、それでも毎晩のように停電があり、蠟燭ろうそくの灯を頼りに読書が続けなければならなかつたことが記憶に残っている。

それから間もなく、滝の川の疎開した知人の家を借りることができて、残されたわずかな家財道具を借りた荷車で運び込み、そこでの新しい生活が始まつた。

毎日、国電で駒込―渋谷間を通つたが、車窓から見える沿線

の風景は実に荒涼としたものだった。目白の学習院や原宿の明治神宮などにはまだ緑の木立が残つてはいたが、あとは見渡す限り瓦礫の山と黒焦げの樹木ばかりだった。ただ、富士山や秩父連山が以前よりはつきり見えるようになっていた。

巣鴨駅は駅舎が焼け落ちてしばらくの間閉鎖され、駒込駅から西ヶ原までの数百メートルの間は一面の焼け野原だった。五月晴れの焼け跡からはレンガ色の砂が舞い上がり、壊れた水道管からは水が吹き上げて道路はぬかるみと化していた。その中を通り抜けて聖学院の近くまで来ると、坂道に沿ってうっそうと繁つた樹木が日陰を作っていて、いつもほつとした気分になることができた。

国鉄をはじめ都内の交通機関は一応運行を続けていたが、いつも物凄い混雑ぶり、乗れば必ずノミ・シラミの襲撃をうけることになり、帰宅後はシラミ退治のため、肌着の熱湯消毒をする生活がしばらくの間続けられた。

大学の消失・終戦

五月二五―二六日、渋谷・青山一带に大空襲があり、常磐松にあつた東京農大も一部の施設を残して大半が焼失した。

このとき私は、東京農大と並行して受験していた陸軍士官学校の試験を受けるため、試験場だった京王多摩川の京王閣にいたが、夜半、都心部を通過してきたB29の編隊が河原に焼夷弾を投下（投棄？）し、それが河原の石に当たってパチパチと音

を立て、火花を散らす光景を目撃したが、建物自体には被害がなく、さほど恐ろしくは感じなかった。

翌日、上りの京王電車が不通のため、いったん八王子に出てそこから中央線で都心に戻らなければならなかった。八王子駅のホームは避難者で溢れ、前夜の空襲の被害が大きかったことを物語っていた。

避難者の中には両下肢が火傷で炭化したようになり、うつろな眼差しの老人が、これも疲れ切った様子の家族に支えられていた光景が今も脳裏に焼きついている。

その翌日、渋谷駅から大学に向かったが、辺り一面はすっかり焼き尽くされ、宮益坂の中腹ではトタン板をかぶせただけの焼死体のゲートルを巻いた両脚が、道路に向かってはみ出している光景を目撃させられた。

登校はしてみたものの、もちろん授業はストップ。それからしばらくは実験室等の焼け跡整理の日が続いた。

ラジオも新聞も客観的な報道に乏しく、カラ元気を煽り立てるようなニュースばかりが幅をきかせていた。これから先どうなっていくのか、この戦争がいつ、どのような形で終わるのか、全く見極めがつかないまま、毎日が過ぎて行った。

今さら一人でじたばたしても始まらない。なるようにしかならないのだし、それに空襲で家も持ち物も焼かれました。今となっては、この身一つを守るだけだという「持たざる者」の

気楽さが、あのとときの自分にとってわずかな救いであったようだ。

空襲の目標が地方都市に移り、東京に残った者はいくらかほっとしたのも束の間、八月六日には広島、九日には長崎に「新型爆弾（原子爆弾）」が投下され、追い討ちをかけるようにソ連参戦のニュースが報じられた。

日本はすでにどたん場に追い詰められている——その事実だけは自分にもよくわかっていても、それをどうすることもできない——。冷静に判断しようとするほど恐怖と絶望感がつのって、気が狂いそうになりながら、何とか押し潰されずにすんだのは、当時の自分に「若さ」があったからかもしれない。また思考能力に生理的なブレーキがかかっていたのかもしれない。

八月十一日、私あてに「陸士合格通知」が届けられたが、そのときの気持ちは受験合格の喜びよりも、「これでもうあと戻りはできない」という、醒めた気持ちのほうが強かった。

焼け残った施設で大学の講義が再開されて間もなく、八月十五日に登校した私たちは、担任の教授から「家に戻って正午に予定されている、ラジオの『重大放送』を聴くように」と促されて帰宅し、家族とともに「終戦の詔勅」に耳を傾けた。雑音が激しく、聴きとり難い放送だったが、それでも戦争が終わったことだけは把握することができた。

全身から力が抜け、頭の中が真っ白になっていくのがわかった。そして、その直後にこみ上げてきたのは「これで死なずにすむ」という喜びの感情だった。せっかく合格した陸士のごとくが多少気がかりだったが、とにかくほっとした気持ちのほうははるかに強かった。

だが、国民の誰もが初めて体験する「敗戦」によって、これから先、自分たちがどんなことになるのか——と思うと別の新しい不安が襲ってきた。強い陽射しを受けた庭先のひまわりを眺め、近くの木立から絶え間なく降り注ぐ蟬時雨せみしぐれに包まれて、日が暮れるまでぼんやりと縁側で時を過ごしたあの日の光景が、終戦記念日が巡ってくる度に私の脳裏によみがえってくる。

終戦直後のくらし

新聞やラジオのニュースは「国体」が護持され、一般国民の暮らしと安全は確保されているから落ち着いて行動するようにと呼びかけていたが、戦時中の指導者たちの自殺などやはり騒然とした雰囲気の日が続いた。

八月三〇日、ついに連合軍が進駐してきた。マッカーサーが厚木飛行場から日比谷の第一生命ビルに入り、同ビルを始め接収された多くのビルには星条旗等が掲げられ、正面玄関には警備のMPが銃を構えて立つ姿が見られた。「進駐」とは「占領」以外のなものでもないことを物語る光景だった。

大学のほうは別途連絡のあるまで自宅待機ということになり、

それから翌年の三月まで、まるまる休校になってしまった。

降って湧いたような自由な時間の中で、改めて自分の置かれている立場を振り返ってみることができたが、実際には中学三年までしかまともな授業を受けていないのに、来春には大学二年にされてしまう、そのことが私には耐え難い苦痛だった。全く実力が伴わないまま、ずるずると押し出されるより、もう一度中学の後半からやり直したい気持ちだったが、家庭の状況は一日でも早く私が「稼ぎ手」になることを求めており、一方、アメリカの指示による「学制改革」が行われる予定であることを知って、とうとう何の行動も起こせないままになってしまった。

燈火管制こそなくなったが、電力事情は極度に悪化していて、ほとんど毎日のように停電があった。また、食糧の不足も更に深刻化し、米の代りに乾燥赤かぶの缶詰や、とうもろこし粉などのいわゆる「救援物資」が配給されたこともあった。

農村への食糧の「買い出し」はごくあたりまえのこととなり、我が家でも主に母がその調達に飛び回ってくれたほか、すでに会社勤めをしていた姉が支給された食糧を持ち帰って来てくれた。

また、終戦と前後して職を失った父は「カツギ屋」の真似事を始め、鎌倉の知り合いから譲ってもらった日本茶や半紙などを都内のブローカーの家に運んで売りさばっていた。私も何度

か運搬役を手伝ったが、当時の横須賀線はひどい混雑ぶりで、大きな荷物を背負って乗り込むのは大変な苦勞だった。隣の進駐軍専用車両には若い日本人女性を連れた兵隊たちがゆったりと座っており、くやしい思いをさせられたものだった。

たつぷりと与えられた自由時間を学習に当てなければという気持ちがあったが、必要な図書が手に入らず、思うようにはならなかった。書店には、わら半紙十枚ほどを折り畳んだような出版物が置かれるようになったが、内容の乏しいものが多かった。一方、焼け残った古本屋も、皆が欲しがるような図書は店の奥に隠して、米などとの「物々交換」に当てていたようで、一般客は手に入れることができなかった。

再び池袋へ

この年の暮れ、借りていた家の持ち主が疎開先から引き揚げて来たので、私たちは三畳一間に移り、そこで年を越してから池袋に戻るようになった。

池袋の焼け跡を管理してくれていた知り合いの人が急造したバラックに住むことになったが、これが実にひどい造りだった。床は地面すれすれで、おまけに傾斜しているため、すぐに物が転がり、屋根のトタン板は穴だらけで雨漏りし、隙間だらけのガラス戸からは冷たい風と砂ぼこりが舞い込んできた。電燈だけはついていたが便所は戸外の簡単な囲いで、ほとんど「野宿」に近い状態だった。

食糧をはじめ、生活物資のほとんどはまだ「隣組」を通じての配給だったので、その受け取りや通報には広い焼け跡の中に点在する家々を回らなければならず、私もしばしばその手伝いをさせられた。

一方、大学のほうは世田谷の旧軍施設を借り受けて四月から授業が再開されることになった。もとの兵舎だけに部屋数は充分だったが、実験設備は実験台とブンゼンバーナーがあるだけで、ほとんど何もできない状態だった。また構内の桜並木に夕日が射して、満開の花の美しさを際立たせているかたわらには、赤錆びた戦車が放置されていた。今度の戦争の虚しさを語りかけてくるような光景だった。

住宅金融公庫の融資を利用して家を建て、まともな畳の上で暮らせるようになったのは、私が大学専門部を卒業して社会人となり、さらに何年か過ぎてからのことだった。

おわりに

以上が私の「空襲・終戦前後の体験」のあらましである。見方によってはささやかな体験かも知れないが、人間形成にとって一番大切な時期に直面したこれらの体験が、以後今日に至るまでの私の人生観や行動の基盤を形成することになったと思っている。

戦後、新憲法が制定され、平和な世の中が訪れて国民の基本的人権が確保されるように思えたのも東の間のことで、世間の

風向きはしだいに私が望んでいる方向とはかけ離れていってしまっただ。

終戦直後とは比較にならないほど向上した今の生活水準を、ことさら非難するつもりはないが、果たしてそれが「人間の幸福」の全てなのか、自らに問いかけてみる必要があるのではないだろうか。

今、日本の政治・経済・文化・教育などの各分野で、指導的役割を果たしている（はずの）人たちがめざしているわが国の進路をそのまま容認していても、特段の権益を持たない私たち一般国民の将来は大丈夫なのだろうか。

戦争放棄を明示した憲法第九条の改悪や国家主義的な言論統制、さらには秘密警察まがいの行動監視など、明らかに「反平和・反人権」的な動きが強まってきているが、マスコミはなぜかそのことに触れたがらない。

五〇年前の悲惨な体験を再び現実のものときせないために、私たちはもつと自分の頭で考え、それを声に出してアピールしていかなければと思っている。

